

ジャック・ロンドンに雇われていた日本人、中田由松  
——山口県大島郡周防大島町<sup>おきかむろじま</sup>沖家室島の機関誌『かむろ』の調査  
から——

Nakata Yoshimatsu, a Japanese Contract Employee of Jack London  
—Uncovered While Researching “Kamuro,” a community Magazine of  
Okikamuro-jima, Suo Ohshima-machi, Ohshima-gun,  
Yamaguchi-ken—

藤原 まみ  
Mami Fujiwara

山口大学国際総合科学部  
Faculty of Global and Science Studies, Yamaguchi University

## 要旨

本稿は山口大学研究推進体「人と移動研究推進体」、及び、山口大学山口学研究プロジェクト「山口県におけるハワイ移民のビックデータ解析と新規事業の創出」が、英語作家ジャック・ロンドン(Jack London)研究における謎を解明したことの報告である。

ロンドンには以下の3点から日本との関わりが深い作家である。(1) 日本についての作品や記事を発表している。(2) 日本関連の作品を発表したラフカディオ・ハーン(Lafcadio Hearn, 小泉八雲)に関心を持ち、ロンドンの創作活動にその影響が伺える。(3) 多くの日本人労働者を雇っていた。上記(2)はこれまでほとんど研究されていない。また、(3)は研究されてきたが、日本人労働者の中でロンドンと最も深く親交した中田由松については全く解明されていない。

上記2種研究プロジェクトにおいて、論者は山口県大島郡周防大島町沖家室島の機関誌『かむろ』の文学・文化表象について研究を進め、その過程で中田由松についての情報を入手した。この発見はロンドン作品における異文化表象の研究に、新たな知見をもたらすものである。さらに、これまで十分に考察されてこなかった、ロンドン作品の異文化表象における、ロンドンのハーン作品受容の影響を考察する上で、有効な視座となりうる。これらの点において、この発見は今後のロンドン作品研究に新たな展開をもたらすことが期待される。

また、『かむろ』の研究はこれまで(山口大学においては)十分になされてこなかった。さらに、散見するこれまでの『かむろ』研究では、『かむろ』を主に歴史・社会的資料として取り扱ってきた。今回の発見は『かむろ』が文化・文学的資源でもあることを示すものであると同時に、山口大

学が山口の歴史・文化的資源に積極的に取り組んでいることを示すものでもある。

## 1. はじめに

本稿は山口大学研究推進体「人と移動研究推進体」(研究代表: 藤原まみ、国際総合科学部、准教授)、及び、山口大学山口学研究プロジェクト「山口県におけるハワイ移民のビックデータ解析と新規事業の創出」(研究代表: 杉井学、国際総合科学部、教授)が発見した、ジャック・ロンドン(Jack London, 1876-1916)研究におけるミッシングリンクを埋める事柄について報告する。この発見がもたらす、ジャック・ロンドン研究の新たな展開については次稿で論じる。

## 2. 『かむろ』

『かむろ』は山口県大島郡周防大島町沖家室島の青年会を前身とする沖家室<sup>せいせいがい</sup>榎々会が、1914(大正3)年9月から1940(昭和15)年3月の第158号まで刊行した機関誌である。『かむろ』は地方の共同体である沖家室島を拠点とした機関誌だが、その寄稿者、及び、読者の大半が島から離れた者であり、さらに、その多くがハワイ、台湾、ペルーなど海外の様々な国や地域に一時的であれ生活圏を築いている点において、大変特異な雑誌である。

生まれ育った土地を離れ、勉学や仕事のために人々が都市へ流入した1880年代後半以降、日本では多くの同郷会が作られていった。それに伴い、同郷会の機関誌が続々と発刊され、会員達は機関誌を通じて「故郷」を発見し「故郷」を創出した(成田,1998)。藤原(2020)は月刊誌になる前の、創刊号から第13号までの『かむろ』を精査し、『かむろ』が共同体創出において果たした役割につい

て論じている<sup>1</sup>。島の外に出て生活拠点を築くことを推奨する『かむろ』の言説空間において、島の外で立身する上で不可欠な教育の重要性と、立身によって築いた財などを島へ還元する「公共」の精神は、島在住者と在外者が共に『かむろ』において言語化し表現することによって育て上げていった「愛郷精神<sup>2</sup>」と共に、記事、エッセイ、小説、「消息」欄など様々な場において繰り返し言及されている。特に、島から外へ向かった成功者の動向を伝えると同時に、成功者による島への愛着が寄付として可視化されている様を伝える「消息」欄は、会員を島の外へと誘うと同時に、会員を島の内へと心理的に引き付ける機能を担っていた。『かむろ』は在島者と在外者との間の物理的距離による間隙を、「教育」と「公共」を基盤とした人的ネットワーク形成によって埋め、在島者と在外者が協同して「カムロ」という創造的共同体を創出することを促す装置であった。

### 3. ジャック・ロンドンと日本

ジャック・ロンドンはアラスカを舞台とする、短編作品「火を熾す」(“To Build a Fire”, 1902)、『野生の呼び声』(*The Call of the Wild*, 1903)、『白い牙』(*White Fang*, 1906)などで世に知られた、アメリカ出身の英語作家である。ロンドンはアラスカ以外にも、自身の船であるスナーク号で試みた世界一周旅行の途上で、ハワイやタヒチなど様々な文化圏を訪れ、そこを舞台とする作品(「支那人」(“The Chinago”, 1909)や「ハンセン病患者クーラウ」(“Koolau the Leper”, 1909)など)を発表している。また、辻井(1990)が「ジャック・ロンドンの生涯について考察する場合、日本や日本人のことをまるっきり欠落させてしまうと、論述が空疎なものとなり兼ねない」と述べているように、ロンドンは日本との関わりも深い。例えば、ロンドンのデビュー作は、アザラシ漁船の乗組員として訪れた日本についての小品「日本沖合の台風」(“The Story of a Typhoon off the Coast of Japan”, 1893)である。また、ロンドンは日露戦争時の1904年に、記者として日本、朝鮮半島、中国を訪れ「黄禍論」(“The Yellow Peril”, 1904)などの記事を発表している<sup>3</sup>。

さらに、ロンドンは中国の台頭を予言したエッセイ、「日本が中国の眠りを覚ましたら」(“If Japan Awakens China”)を1909年に発表している。ロンドンはそのエッセイを以下のように書き起こしている。

When one man does not understand another man's mental processes, how can one forecast the other's future action? This is precisely the situation today between the white race and the Japanese. In spite of all our glib talk to the contrary, we know nothing (and less than nothing in so far as we think we know

something) of the Japanese. It is a weakness of man to believe that all the rest of mankind is moulded in his own image, and it is a weakness of the white race to believe that the Japanese think as we think, are moved to action as we are moved and have points of view similar to our own.

Perhaps the one white man in the world best fitted by nature and opportunity to know the Japanese was Lafcadio Hearn. To begin with, he was an artist, and he possessed to an extreme degree the artist's sympathy. By this I mean that his sympathy was of that order that permits a man to get out of himself and into the soul of another man, thus enabling him to look at life out of that man's eyes and from that man's point of view—to be that man, in short. (London, 1909<sup>4</sup>)

他者と自分との間にある考え方の違いについて理解しないこと、ロンドンによれば、それが異文化理解を妨げる原因である。ここでロンドンは日本理解の達人としてラフカディオ・ハーン(Lafcadio Hearn, 1850-1904)を紹介し、さらに、ハーンによる日本理解において重要な役割を果たした、「芸術家的共感力」(the artist's sympathy)について論じている。加えて、ハーンが日本人の心性を深く理解した上で、尚且つ、理解し得ない部分があることにも自覚的であった点こそが、ハーンが真の日本理解者である所以である、とロンドンは論を続けている。

日本理解の先駆者ハーンに対する関心と同様に、ロンドンはハーンの文学作品に対しても関心を持っていたのではないだろうか。「人力車夫境長と妻君と、二人の息子の話」(“Sakaicho, Hona Asi and Hakadaki”, 1895)は話者である西洋人にとって、不可思議な日本人達のありようを、西洋人の尺度で解釈するのではなく、不可思議さをそのままに呈示した作品である。これは上で確認した、ロンドンのハーン評におけるハーンの異文化に対する姿勢に類似しており、ロンドンの創作活動にハーン作品が何らかの影響を及ぼした可能性を示唆している。また、アラスカを舞台にした作品「面目潰れ」(“Lost Face”<sup>5</sup>, 1902)においても、ハーンの影響がうかがえるが、この点については、次稿において述べたい。

さらに、ジャック・ロンドンと日本の関係を考察する上で重要な事項は、ロンドンが多くの日本人を雇用していた点である。辻井(1990, 1991)はロンドンが雇い入れた関根時之助や世良誓を取り上げ、ロンドンと日本人労働者との関わりについて報告している。何故ロンドンがとりわけ日本人を雇い入れたのか、そして、その事がどのようにロンドンの創作に影響を与えたのか、あるいは、与

えなかったのかについては、今後の考察が必要である。

日本ジャック・ロンドン協会名誉会長の辻井は1990年に発表した「J・ロンドンに仕えた日本人使用人たち—関根時之助の場合—」において、以下のように述べている。（この論文は2001年出版の『地球的作家ジャック・ロンドンを読み解く大自然と人間—太古・現在・未来』に収録されている。）

書簡集や伝記を多少繰ってみるだけでも、日本人名が散見できる。そしてその筆頭は、何と言っても Yoshimastu（まま）Nakata（中田由松）であろう。彼は単なる使用人というよりも、ロンドンがわが息子のようにかわいがった、まず例外と言っていい日本人であった。（中略）ロンドンとの関係の親密度の点から言えば、中田由松をいの一番に取り上げるのが本筋なのかも知れないが、残念ながら資料的にも彼の縁者からのデータ聴取の点でもまだその機が熟していない。（辻井, 2001).

ロンドンとロンドン作品を考察する上で、ロンドンが雇用していた日本人労働者の問題は欠かせない要素である。ロンドンと日本人労働者との関係において、ロンドンに息子のように可愛がられながらロンドンの秘書的役割を担い、ロンドンの下で8年近く働いた中田由松(1889-?)は、最も重要なと言えるであろう。しかしながら、中田由松についての事柄は、ロンドン研究の泰斗、辻井が上記論文を発表した1990年から論文集を出版した2001年、そして、現在(2021年)に至るまで、日本におけるロンドン研究のみならず、世界におけるロンドン研究においても、全くの藪の中であった。

#### 4. 中田由松

中田由松はロンドンと日本との関係を考察する上で重要な存在である。しかしながら、それにも関わらず、これまで中田由松はロンドン研究において謎の存在であった。ところで、先に確認したように、山口県大島郡周防大島町沖家室島の機関紙『かむろ』の「消息」欄は大変充実したものであった。その創刊号の「消息」欄には以下のような記述がある。

中田由松 米国コールサノマグレンエレニ於ケル冒険小説ノ大家ジャツクロンドン氏ノ宅ニアリ、氏の未来ニ対スル遠大ノ希望ヤ如何ニ（下線は引用者による）

『かむろ』「消息」欄の情報収集方法は一樣ではなく、情報源が本人であるものもあれば、第三者の伝聞を元にした情報もある。故に、ここでの「氏の未来」の「氏」が中田を指すのか、ロンド

ンを指すのか判然としない。しかし、この「消息」欄は中田由松が『かむろ』創刊の年である1914年頃に Glen Ellen, Sonoma にあった、ジャック・ロンドンの牧場に居住していた事実を明示している。

山口県大島郡周防大島町の日本ハワイ移民資料館所蔵の『渡航者名簿』によると、中田は1906(明治39)年にハワイに渡航したことが記されている。（図1）

渡航者名簿	氏名	年齢	性別	職業	備考
...	中田由松	...	...	...	...

(図1 『渡航者名簿』、日本ハワイ移民資料館蔵)

『かむろ』第5号の「会員の消息」には「中田由松氏 加州桑港二二三六ポスト街聖公会。氏はロ氏の家を辞しここにおいてひたすら勉学につとめらるる由」（下線は引用者による）と記されており、中田が1915年の時点においてロンドンの牧場を辞し、カリフォルニアで学生生活を送っていることが明記されている。そのうえ、この『かむろ』第5号には、在米中田生というペンネームを使った中田のコラム「布哇を去った後の感想」が収録されている。また、1916年の『かむろ』第9号では、中田は同じ筆名で「小生昨年結婚以来、例の冒険旅行を思留り桑港来りて、当地の歯科大学に入学致し去る五月三十一日第一年級を首尾好く終業仕候。」と記し、歯科大学での学業が順調であることを報告している。なお、日本ハワイ移民資料館所蔵の『発展名鑑』(昭和15年発行)には、中田がハワイのホノルルで歯科医として開業したことが記録されている。（図2）



(図2 『発展名鑑』、日本ハワイ移民資料館蔵)

さらに、『かむろ』第84号(1929)には、中田が同じく沖家室島出身の大谷松治郎と共に、沖家室小学校に米国製のピアノを寄贈したこと、そして第86号(1930)にはそのピアノの様子が記されている。先に確認したように、教育の力を用いて島の外で立身出世を果たし、その成果を島に還元する「公共」の精神は、『かむろ』の言説空間において、愛郷精神とともに繰り返し言及された言葉であった。中田由松はこの点において、まさに『かむろ』の申し子であった。

## 5. 最後に

本稿では山口大学研究推進体「人と移動研究推進体」、及び、山口大学山口学研究プロジェクト「山口県におけるハワイ移民のビックデータ解析と新規事業の創出」で実施した、一地方の機関誌『かむろ』の研究が、世界的作家であるロンドンの研究において、長らく謎であった事項を解明したことを報告した。この発見は地方の知を活用することの重要性を明示していると言えよう。

今後はハワイやカリフォルニア州で発行されていた邦字新聞なども含めて、中田由松が寄稿した記事の存在を確認しながら中田の活動の跡を探り、ロンドンとの交流の様を探っていきたい。

さらに、中田由松との交流がジャック・ロンドンの創作にどのような影響を及ぼしたのかについ

ては、ロンドンとハーンとの関係性と共に、今後の課題としたい。

## 謝辞

日本ハワイ移民資料館所蔵資料について、西田純子氏に大変お世話になりました。お礼申し上げます。

本稿は、科学研究費助成事業(20K12996)「ラフカディオ・ハーン分野横断的研究—ハーンの翻訳・創作・教育の相互影響関係」、山口大学研究推進体「人と移動研究推進体」、山口大学山口学研究プロジェクト「山口県におけるハワイ移民のビックデータ解析と新規事業の創出」の研究成果である。

## 【参考文献】

- 沖家室惺々会,1914,「消息」『かむろ』vol.1.p.21.  
 \_\_\_\_\_,1915,「会員の消息」『かむろ』  
 vol.5.p.17.  
 在米 中田生,1915,「布哇を去った後の感想」  
 『かむろ』vol.5.p.10.  
 \_\_\_\_\_,1916,「故郷の人に」『かむろ』  
 vol.9.p.11.  
 辻井栄滋,1990,「J・ロンドンに仕えた日本人使用  
 人たち—関根時之助の場合—」『立命館  
 言語文化研究』vol.2.no.2。(『地球的作家  
 ジャック・ロンドンを読み解く 大自然  
 と人間—太古・現在・未来』丹精社、  
 2001.pp.272-89.)  
 \_\_\_\_\_,1991,「J・ロンドンに仕えた日本人使  
 用人たち—世良誓の場合—」『立命館言  
 語文化研究』vol.2.no.3。(『地球的作家ジ  
 ャック・ロンドンを読み解く 大自然と  
 人間—太古・現在・未来』丹精社、  
 2001.pp.290-307.)  
 成田龍一,1998,『「故郷」という物語 都市空間  
 の歴史学』吉川弘文館, p.35.  
 藤原まみ,2021,「『かむろ』における<カムロ>形  
 成について」*Journal of East Asian  
 Identities*, vol.6. pp.45-54.  
 Jack London, 1909, “If Japan Awakens China”, *Sunset  
 Magazine*,  
[https://thegrandarchive.wordpress.com/if-  
 japan-awakens-china/](https://thegrandarchive.wordpress.com/if-japan-awakens-china/),(参照 2021.12.12)

<sup>1</sup> 『かむろ』は第14号以降、季刊誌から月刊誌になる。月刊誌になって以降の『かむろ』の特徴については今後の課題である。

<sup>2</sup> 『かむろ』創刊号の巻頭ページには「家室」および「かむろ」への思いがまとめられている。「創刊号最初のページに掲載されたこの文章は、雑誌『かむろ』とは想像的共同体<カムロ>—現実存在する地域であると同時に、人々の心の中に存在する理想郷—を人々が協同し創造していく場であることを宣言しているのである。」(藤原(2020))

<sup>3</sup> ロンドンの人種に対する姿勢については再検討されている。Daniel A. Metraux, “Jack London and The Yellow Peril” *History, Literature, and the Construction of “Memory” in Asia*, volume 14:1(Spring 2009) 2009.

<sup>4</sup> 参照元にページ数の記載はない。引用は“If Japan Awakens China”の書き出し部分を示している。

<sup>5</sup> ロンドンの“Lost Face”はアラスカを舞台とした短編小説である。しかしながら、設定やプロットなどにおいて、ラフカディオ・ハーンが1904年に発表した *Kwaidan: Stories and Studies of Strange Things* に収録されている“Diplomacy”との類似点が指摘できる。この点については次稿において論じたい。

<sup>6</sup> 辻井(1991)はロンドンに雇われていた世良誓が書き記した原稿を紹介している。そこに中田について以下の記述がある。「中田君は主とし [て] 事務所の方面の掛りとして過去八年間も働いて居る」